

特集

パンデミックと世界の芸能



ベンガルの絵語りポトゥアが描いたコロナ禍 岡田 恵美

パンデミックを乗り越えたエチオピアの芸能者たち 川瀬 慈

インドネシア・バリのハイブリッド型芸術祭 梅田 英春

日本における「音楽」という場の拡張と創造 小西 公大



目次

- 1 エッセイ 千字文
幻の屋久島古謡を追って
大石 始
- 特集**
パンデミックと世界の芸能
- 2 ベンガルの絵語り
ポトゥアが描いたコロナ禍
岡田 恵美
- 4 パンデミックを乗り越えた
エチオピアの芸能者たち
川瀬 慈
- 6 インドネシア・パリの
ハイブリッド型芸術祭
梅田 英春
- 8 日本における「音楽」という場の
拡張と創造
小西 公大
- 10 みんぱく回遊
リズムの世界を旅する
神野 知恵
- 12 みんぱくインフォメーション
- 14 ○○してみました世界のフィールド
アンデスの山道は登り優先
藤井 龍彦
- 16 コレクションあれこれ
一杯のコーヒーに込めた
思いをつないで
西尾 哲夫
- 18 シネ倶楽部 M
ミツパチとともに生きる
——「ハニーランド 永遠の谷」
池谷 和信
- 20 ことばの迷い道
3つの言語を操る「メンヘラ」女子
岡野 英之
- 21 編集後記・次号の予告

表紙

ワクチン接種を促すポト絵
(インド、西ベンガル州ノヤ、2022年)

幻の屋久島古謡を追って

大石 始

二〇一九年から屋久島のある古謡をテーマに取材が続いている。その歌の名は「まつばんだ」という。「まつばんだ」に関心を持つきっかけはいくつかあった。まず、この古謡のメロディーに琉球音階が潜んでいるということ。一般的に琉球音階の北限は奄美群島南部の与論島ないしは沖永良部島と言われている。だが、屋久島はそこからさらに北方に浮かぶ島だ。大隅半島の佐多岬からはわずか六〇キロ。そんな島で琉球音階の古謡が歌われてきたことに興味をそそられたのだ。

暮らしのなかで「まつばんだ」を歌う習慣は屋久島でも一九七〇年代で一度途絶えている。近年、この歌が島の人々によってふたたび歌われつつあることも僕の好奇心をくすぐった。なぜ彼らは「まつばんだ」にふたたび光をあてようとしているのだろうか。そもそもなぜ屋久島では琉球音階の古謡が歌われていたのか。いくつもの疑問が立ち上がるなかで、一九七〇年代に録音された古老たちの歌を聴く機会にも恵まれた。それは沖縄で歌われたものと言われても信じてしまいそうなもので、メロディーの背後には九州南部から先島諸島へと続く広大な海の世界が広がっているように感じられた。「まつばんだ」の背景を探るなかで浮かんできたのが、南西諸島の島々を行き来していた海の民の存在である。鹿児島島の南部には現在も琉球人踊りなど琉球との交流を裏づける芸能が継承されているが、屋久島でもこうした痕跡をあらゆるところで見ることができると。たとえば、島南部の栗生集落ではかつて「ジユクジン網」という追い掛け網漁法が行われていたが、「ジユクジン」とは現地の言葉

で「琉球人」のことを指す。つまり、その漁法自体が琉球から伝えられたものなのだ。「まつばんだ」から聴こえる琉球音階もまた、琉球との交流・接触を裏づけるものといえるはずだ。

なお、「まつばんだ」は屋久島固有の歌ではない。以前はトカラ列島や口之三島でも祝いの歌として歌われており、歌われる文句はそれぞれ異なるが、屋久島版の「まつばんだ」にはこんな一節がある。

「屋久のお岳をおるかにかや思うなよ
金のな 蔵よりや なお宝な」

屋久島の山々は金や蔵よりも大事な宝である——「まつばんだ」に刻み込まれたその言葉は、屋久島に住む人々の精神を表すものである。豊かな自然と共生してきた彼らのなかには山を思う気持ちがかく自然な形で育まれていて、「まつばんだ」にはそんな心のうちが鮮やかに写し込まれているのだ。

ひとつのメロディー、ひとつの言葉からその地に生きた人々の息遣いや鼓動が聴こえてくる。これだから歌をめぐるとは旅はやめられない。

プロフィール

1975年東京都生まれ。文筆家、選曲家。これまでのおもな著書に『ニッポン大音頭時代』（河出書房新社）、『ニッポンのマツリズム』（アルテスパブリッシング）、「奥東京人に会いに行く」（晶文社）、「盆踊りの戦後史」（筑摩書房）など。2022年11月には屋久島の古謡「まつばんだ」の謎に迫る新刊「南洋のソングライン——幻の屋久島古謡を追って」がギルティブックスから刊行。

パンデミックと世界の芸能

ベンガルの絵語り

ポトウアが描いたコロナ禍

新型コロナウイルス感染症のパンデミックは、さまざまな芸能にも影響を及ぼした。人の移動や集うことが厳しく制限されたコロナ禍で、芸能の空間はいかに変化したのだろうか。そして世界各地の芸能者たちは何を考え、逆境に対してどのように立ち向かってきたのだろうか。

岡田 恵美 民博人類基礎理論研究部

ポトウアとポト絵

二〇二二年四月、感染の波の合間をぬって、インド・西ベンガル州のノヤという田園地帯の村を訪れた。そこにはポトウアとよばれる、世襲で絵語りを生業としてきたイスラーム教徒が二五〇人ほど暮らしている。数十年前までは近隣のヒンドゥー教徒の村々を巡り、ヒンドゥー神話や土着神の物語を描いた絵巻物を手に、歌をとおして語り、食料や金銭の施しを得てきた。かつてはインド各地にこうした絵語りの職業集団が存在したが、近代化とともに多くは消滅し、このノヤ村でも村々への巡回はもうおこなわれてはいない。

ポトウアの絵語りに欠かせないのが、幅五〇センチメートル程の絵巻物であるポト絵だ。物語は上から下へとコマ割りされて展開し、長いもので五メートルに及ぶ。黒色が際立つ輪郭線と、すべて自然素材の顔料で彩色されたポト絵には、ヒンドゥー教のドゥルガー神や、蛇の女神モノシャの物語が大胆な構図で描かれる。一時は、絵語りが衰退してポトウアの数も減りましたが、近年は伝統工芸に対する州政府やNPOの支援に加え、毎年このノヤ村で開催されるポト・マヤ祭の観光資源効果もあって、彼らは生きのび



コロナ禍を描いた村の壁画

てきた。国内工芸展で数多く受賞し、そのポト絵は国外の美術展で扱われ、欧米へ招聘されることもめずらしくない。正に近隣の村から世界へと活動の場が拡大し、「絵語り」という芸能者から、ポト絵という「作品」を生み出す「絵描き」として脈絡を変換してきた。いつても過言ではない。

だが、二〇一九年末から世界を震撼させたパンデミック。インドも長期にわたってロックダウンが強いられ、医療は崩壊し、多数の命が奪われた。ノヤ村のポトウアは、観光収入や出品の場、国外への流通も絶たれて経済的に困窮しているのではないか、そう思いながら村に足を踏み入れた。

コロナ禍を描き、歌う

乾季特有の灼熱の太陽に照らされた住居の壁面には、ウイルスの脅威やマスクを装着して家に籠る人びとが象徴的に描かれていた。ポトウアの夫婦の家を訪れると、コロナ禍でポトウアの重鎮が亡くなったことを悲しみ、妻が歌を作り、夫がポト絵を手掛けた作品があるという。そこには、無数の突起をもったコロナウイルス



ウイルスの脅威を描いたポト絵



彩色後に黒の輪郭線を描き込む

をまとって、鋭い牙を突き出し、真っ赤な舌を出した怪物と、息絶える人びと、それを中継するマスコミ。その地獄絵図のような構図と色彩は、彼らにとつて共通の脅威を大胆に可視化したものだ。すぐに近所の女性たちが集まり、独唱と斉唱を交互に絵巻物のポト絵を指差しながら歌が始まった。

友よ、おじさん、妹たちよ。みんな聞いて／コロナワクチンの接種を恐れないで／再びやってきた！ コロナウイルス！／距離をとつて、マスクを着けて／人混みにはもう誰も行かない／結婚式にも行かない／映画館や劇場にも行かない／市場に行くときはマスクを着けて／靴を履いて家に入る人はいないでしょう／今は誰もが除菌を忘れない／科学者たちがワクチンを考え出した／ワクチンが病院に届いた／みんなワクチンを打ちに行つて／（歌詞抜粋）

ポトウアに見る柔軟性とレジリエンス

パンデミックによって、芸能者が置かれた環境や芸能の場は大きく変化した。SNSやオンラインメディアを活用した芸能空間が急速に発展し、逆境に立ち向かう柔軟性や発信力は芸能者が存続していくための要となった。

わたしの目に映ったパンデミック後のポトウアは、レジリエンス（困難に直面したときの回復力）に満ちていた。ワクチン接種を題材とした啓蒙的な絵語りをはじめ、時事を巧みに取り入れる柔軟性や、伝統的には男性が担っていた絵語りを今では女性が進出し、集団歌唱で力強く発信する力に衝撃を受けた。また、コロナ禍で来訪者が皆無な状況においても、スマホ一台を駆使して、新作のポト絵をSNSで次々と紹介し、キャッシュレス決済で国内外へ作品を郵送し収入を得ているという。そこに立ち止まっていない姿はなかった。

パンデミックを乗り越えた エチオピアの芸能者たち

川瀬 慈 かわせ いづし 民俗人類基礎理論研究部

アズマリ

単弦楽器マシニコを奏で歌うアズマリは、エチオピア北部の社会において活動をおこなう世襲の音楽職能集団である。当集団は、道化師、放浪の吟遊詩人、政治的な扇動者、社会批評家、庶民の意見の代弁者、王侯貴族お抱えの楽師などとして、古くから社会的に広い範囲で活動をおこなってきた。アズマリは、結婚式、洗礼式や家屋の新築祝いなどの祝祭儀礼の場において、男女のペアであるいは単独で歌う。北部の主要な宗教であるキリスト教エチオピア正教会にかかわる儀礼の場で歌うことにより、儀礼の進行を司る。首都のアジスアベバにおいて活動をおこなうアズマリの

多くは北部アムハラ州の村々にルーツをもつ。故郷の村で農牧を営みながら、定期的に都市に出稼ぎに赴くアズマリも多い。

アズマリがもつとも得意とするのはほめ歌だ。歌い手は歌いかける相手の容姿や職業などをテーマに即興でほめ歌を繰り出し、相手が良い気分をさせシエレマツト（おもにお金の報酬）を受け取る。アズマリによって歌われる内容は多様だ。国際政治、性風俗、ワールドカップ、政治家のスキヤンダル、なんでもありだ。聴き手は、歌に積極的に参加する。すなわち、聴き手も歌詞を即興で作りあげ、歌い手になげかけるのだ。歌い手は一字一句、聴き手が作った歌詞を模倣するのである。アズマリの歌をとおして聴衆どうしが政治的な議論をおこなう場合もあるし、互いをほめたたえ合うようなこともある。

アズマリベットの

エチオピア北部の都市では、一九九〇年代初頭の社会主義政権崩壊にともなう夜間外出禁止令の解除以降、アズマリ音楽専門のクラブ、通称「アズマリベット」が増加した。多くのアズマ



アズマリベットでの民族舞踊(写真の撮影場所はすべてエチオピア、アジスアベバ。2018年)

リベットは、農村で使用される民具の実物が飾られ、演奏者は農夫のコスチュームを纏い、農村の牧歌的なイメージを醸し出す。いわばアズマリベットはいなかっぼさが意識的に演出される場なのだ。生き急ぐ都会人に対して、あたかもいなかへの憧憬をかきたてるかのようである。

アズマリベットの夜は長く熱い。客たちのなかには、自身のお気に入りの歌い手がいる店を朝まではしごする者もいる(わたしがまさにそれだ)。アズマリベットにはまた、プロの踊り子が配属され、エチオピア諸民族の舞踊を踊る。客たちも座って見ているだけではない。立ち上がり、踊り子たちと向かい合い、肩をこきざみにふるわせ、全身を波打たせるイスクスタという踊りに参加する。皆混然一体となるのだ。

アズマリベットの苦境

パンデミックの時代がエチオピアにもやってきた。二〇二〇年には、エチオピア政府主導の、いわゆるソーシャル・ディスタンシング(社会的な距離の確保)が実践され、都市部におけるアズマリの活動拠点であるアズマリベットは閉鎖され、アズマリが演奏をおこなうような祝祭儀礼の開催は控えられた。日本にいたわたしのもとにはなじみのアズマリたちからSNSをとおして「家賃が払えない」「仕事がないから食べていけない」「たのむからすぐに金を送ってくれ」というメッセージが何度も届いた。実際、友人をとおして何名かのアズマリに送金したこともある。



右:アズマリベットで歌うアズマリの男女(2004年)
左:農夫の恰好をして演奏するアズマリ男性(2004年)

しかしながら、危機的な状況を創造的にのりきったアズマリたちもいる。アズマリベットのいくつかの店舗は、動画サイトYouTubeを活用し、ライブ演奏を世界にむけて毎週配信した。また、ある店舗は、いわゆるクラウドファンディングをとおして、資金調達に力を注ぎ苦境を乗り越えた。北部の故郷の村落に戻り、一時的に農牧業に従事し、パンデミックの収束を辛抱強く待つ者もみうけられた。いずれもなかなか賢いやり方であると感心させられた。

ちょうどそのころ、人気アズマリ歌手のイサク・モーガスがたびたびテレビ番組に登場し、

あなたの食事中、他の人が腹を空^すかせるなんてことがないようにね/他者への配慮が必要/貧しい者を助けわけ与える/それこそがエチオピア人であるということ/

と歌い人気を博した。

二〇二二年に入るとエチオピアではコロナウイルスによる重症者が急速に減り、社会的な行動規制が解かれるに至る。二〇二二年五、六月にアジスアベバに赴き確認したところ、歌い手、踊り子、客が汗を出して絡みあうアズマリベット特有の熱気は健在であり、パンデミックの時代を経験したことなど嘘^{うそ}のようであった。都市の芸能者たちの活動は、ほぼ元の姿に戻っているといえる。



酒場で演奏をおこなうアズマリの男女(2022年)

インドネシア・バリのハイブリッド型芸術祭

梅田 英春 うめだ ひではる
静岡文化芸術大学教授

インドネシア・バリ島では、一九七九年からバリ州が主催する大規模なバリ芸術祭が、州都デンパサールのアートセンターで一カ月間にわたって開催されている。そこではバリ島各地のさまざまな芸能が上演されるほか、インドネシア各地の芸能公演もおこなわれる。また室内展示場では工芸品の見本市も開催され、たくさんの人びとがバリ全土から集まる装飾品や織布を買い求めるためにやって来る。

三年ぶりの開催

ところが二〇一九年末から世界的に流行した新型コロナウイルス感染症により二〇二〇年は中止、二〇二一年は限定的にオンラインで実施されたがアートセンターでは開催できなかった。その後感染症がインドネシアで下火になりつつあった二〇二二年六月、ついに州政府は六月一日から七月一日までの一カ月、三年ぶりにアートセンターでのバリ芸術祭開催に踏み切ったのである。しかし再開した芸術祭は以前と異なり、ハイブリッド型芸術祭、つまり、有観客での公演と配信（同時配信とオンデマンド）を合わせもつ芸術祭へと変貌したのだった。

さて二〇二二年のハイブリッド型芸術祭はいったいどのような雰囲気だったのだろうか？ 芸術祭の幕開けは官庁街でのパレードである。バリ州各県や特別区などの自治体、大学、高校などの団体が趣向を凝らした衣装を身にまとい、伝統音楽を演奏して、特別席の招待客やパレードを一目見ようと集まった地元の人びとの前を行列する。まだ完全には感染症が終息していない時期ではあったが、実際には人数規制もなく、会場は大勢の観客であふれていた。ただこのパレードはインターネット配信され、パンドミックをとおしてバリの人びとは、バリから世界へと芸術祭を発信し始めたのである。

感染症への対策

さて、会場のアートセンターでも入場規制はなかったが、室内に入るときにはインドネシアのコロ

ナウイルス感染症対策のアプリを用いて、入口の二次元コード（QR）をスキャンすることが求められていた。とはいえチェックする担当者もおらず、じつにのんびりとした光景である。実際のところ、すでに六月のバリでは、パンドミックならぬ「エンデミック endemic」（end × pandemic を掛け合わせた造語。本来の英単語の意味とは異なる）なることが生まれ、この名称を冠したイベントが各地で開催されるなど、もう感染症の流行は終わったかのような雰囲気になっていた。マ

スク着用者も日々減少する状況と開催の時期が重なったともいえよう。上演会場はどこも人だかりであり、観客席はいわゆる「密」な状態であったが、例年と比べればアートセンター内での同時帯の公演開催数は少なく、会場全体での観客数を減らす努力はおこなわれていた。工芸品の見本市も例年どおり実施され、色とりどりの織布を製作する店が並んでいる。大々的に工芸品の宣伝はしていないものの、各店舗ともにインスタグラムなどを利用して入荷製

品や混雑具合などを情報発信しており、買物客はそうした情報を参考にしながら会場を訪れるなど、店舗ごとにさまざまな工夫が見られた。

ハイブリッド型芸術祭の成果

芸能公演に関していえば、主要な公演はYouTube同時配信とオンデマンド配信がおこなわれ、これまでは会場でしか観ることができなかった芸術祭は、バリ人にとってじつに身近な存在へと変わった。アートセンターから距離のある山村であっても、携帯電話をとおして多くの人びとが公演の観客となり、鑑賞した人びとはみな批評家のごとく公演について語り始め、感染を気にする高齢のバリ芸能愛好者や演奏者たちもまた、自宅でバリ芸術祭を楽しむことができたという。

新型コロナウイルス感染症は、確かに一時的にバリの文化的活動を停滞させたことは否めない。しかしそれはほぼ世界的な現象であり、いかなる柔軟性をもって文化活動を継続したのかというレジリエンスが重要である。新型コロナウイルス感染症のなかで文化活動継続の模索を続け、新しい形での芸術祭が実施できたことは今後のバリ文化、芸術の継承に大きな影響を与えるに違いない。



バリの伝統的な織布の見本市



右:コロナ感染症用アプリのスキャン用二次元コード(QR)
左:バリ芸術祭のポスター。2022年のテーマは「聖なる水」



ブースで同時配信をするスタッフたち



小西 公大こにし こうだい
東京学芸大学准教授

二〇二〇年以降の新型コロナウイルス感染症のパンデミックによる混乱が増すなかで、もつとも大きな影響をうけた領域のひとつに音楽・芸能業界があげられるだろう。「不要不急の外出自粛」が叫ばれるなか、コンサートや劇場、ライブハウスへの自粛要請や収容人数の制限が徹底され、二〇二〇年度は前年度比で八二パーセントの市場規模の減少を見たという報告もなされている（ぴあ総研二〇二二年）。音楽・芸能カルチャーの多様さや創造性を担保してきた小規模ライブハウスや劇場、インディペンデントアーティストやインディーズ系レコードに直接的な打撃が与えられ、これらの「ハコ」や「レベル」が軒並み潰れていく姿を目の当たりにすることとなった。

こうした状況で「生き残り」をかけて展開されたのが、音楽・芸能関連サービスのデジタル化だ。「モノ」としてのコンテンツ（CDなどのソフトウェア）は、ストリーミングをはじめオンラインでの配信サービスへと大きく舵をとり、ライブ／フェス体験やアーティストとの双方向コミュニケーションなどに見られる「コト」への消費欲求、ウェブを通じた仮想空間におけるイ

ベントの可能性を急激に拡張することになった。

この現状をうけ、芸能世界を研究対象とする人類学者に何ができるのかと考え、わたしは音楽ライターらとともに「ポスト・コロナにおける音楽について考えるグループ」なる無料のオンラインサロンを開設した。芸能を取り巻く最新の動向やあらたな配信技術の紹介、ときには厳しい現状や愚痴などを共有しながら、未曾有の状況における「音楽」のあり方を考えるための対話の場を目指した。こうした活動のなかで、既存の芸能やエンターテインメント形態とデジタルツールとの接合時に見られるふたつの大きな方向性があると実感した。それは、技術の駆使による徹底した「現実世界」の再現という方向と、リアルとヴァーチャルのあいだの齟齬やズレを活かしあらたな音楽を創生していく方向である。それぞれ見ていこう。

「生」の感覚へのこだわり

コロナ状況下で既存の大型フェスを中止／延期せず、オンライン配信する方向に先陣を切ったものとして、TOKYO JAZZ +plus LIVE STREAM（二〇二〇年五月三三、二四日開催）がある。本来

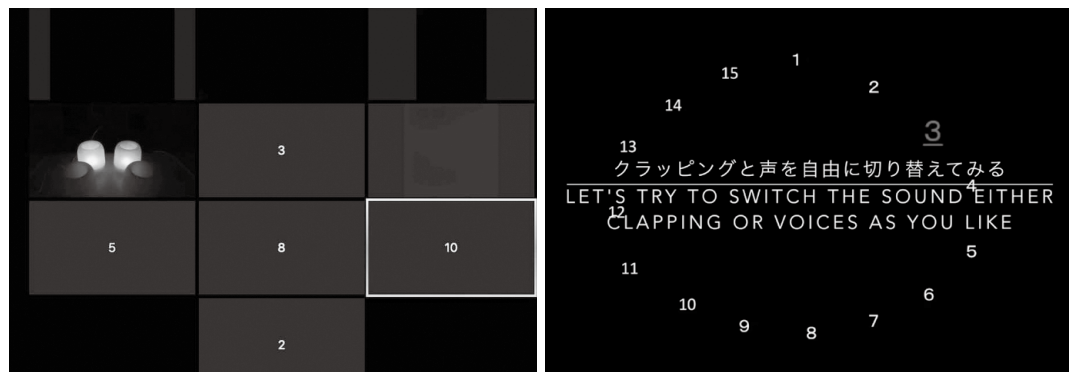
張する「音楽」をめぐる意味と方法論に向けた、新しい実験的営為の力強さだった。

クを利用したミキシングや、それと同時に制作されるライブアートなど、次世代の音楽経験を豊富に組み込んでいた。後におこなった、総合ディレクター山中宏之氏へのインタビュからは、「生」の感覚への徹底したこだわりとともに、別の空間に属するアーティストによるリアルタイム・セッションまで技術的な問題で到達できなかったことへの無念さが伝わってきた。

ヴァーチャルで偶発的な「音楽の場」の創造

一方で、口腔や身体が出す偶発的なサウンドを組み合わせることで、強烈な一回性をもつ「音楽」（「つむぎね」メソッド）を追求してきた作曲家・宮内康乃みやうち のぶのは、実験的にウェブ会議用ツールであるZoomを用いたセッションを企画した。それは「生」のヴァーチャルな再現可能性に向かうのではなく、会議用ツールならではのタイムラグやハウリング、参加者が同じ場を共有していないことから生まれる空間認識のズレや、それぞれの部屋から発せられるノイズ（空調の音や通り過ぎる救急車のサイレンの類）などを、いかに「音楽」の創造へとつなげていくか、という実験であった。

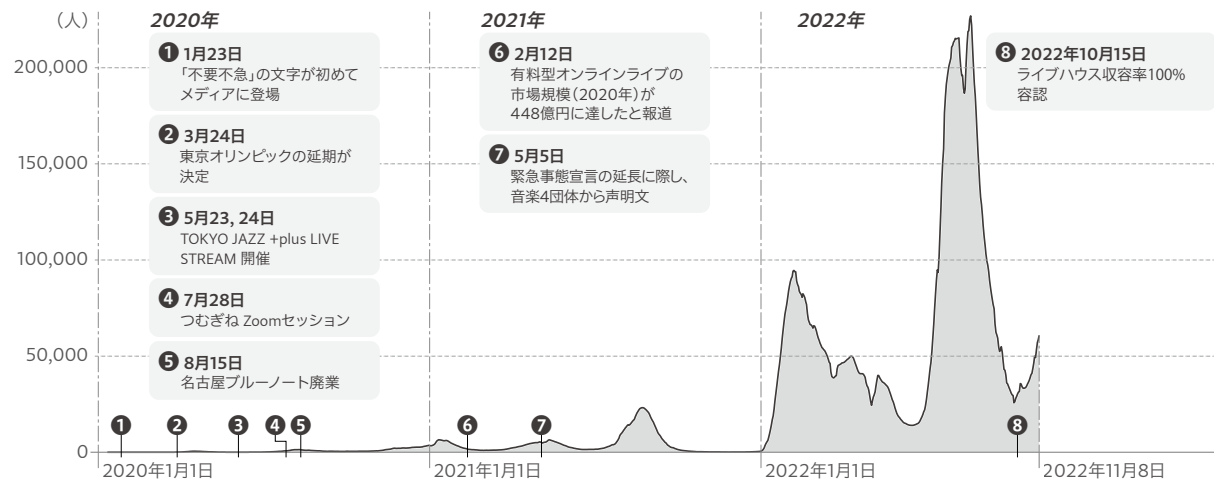
パンデミックが我々に問いかけたのは、一時的な忍耐によって復活する世界を待ち望むのではなく、突き付けられた不可能性からあらたな可能性を拓いていこうとする革新的構えの重要性だった。前述のふたつのような音楽シーンの断片から見えてきたものは、時代の転換期に拡



作曲家・宮内康乃が開催したZoomを利用した実験的なセッション。参加者全員が画面を黒くして名前をナンバリングし、点灯する光に合わせて声だけを重ねていく（画像提供：つむぎね・宮内康乃氏）

ナンバリングされたメンバーが、空間的な位置を把握するために画面共有して順番を把握している様子。画面の指示に合わせて順番に声や手拍子をつなげて即興で音楽をつくりあげていく（画像提供：つむぎね・宮内康乃氏）

コロナ禍における日本の音楽業界のタイムライン



グラフは日本における、1日当たりの新型コロナウイルス新規感染者数(7日移動平均)の推移 ※COVID-19 Data Repository by CSSE at Johns Hopkins Universityを元に作成。出典：<https://ourworldindata.org/covid-cases>



TOKYO JAZZ +plus LIVE STREAMの総合プロデューサーである山中宏之氏(右下)へインタビューするフリーライターの二階堂尚氏(左上)と筆者(右上)



←山中宏之氏のインタビュー動画は左の二次元コード(QR)もしくはURLで <https://youtu.be/egriK39Qqms>

ならNHKホールを使用しておこなわれる世界屈指のジャズアーティストが参集するフェスだが、素早い判断でオンライン化を決め、短時間で具現化した奇跡的なイベントだったといえる。前半部は著名アーティストのメッセージや過去のライブ映像を中心に編成され、ライブというより「番組」的な様相を帯びたが、その後ジャズピアニストのリアルタイム演奏やセッション、ジャズ作曲家によるヴァーチャルなビッグバンドの動画（演奏者がそれぞれ自宅から別撮りした演奏動画を見事に組み合わせた仮想のセッション）、無料配布トラッ

みんなの展示場で「リズム」を感じるモノといったら何を思い浮かべるだろうか。きつと多くの人が、音楽展示場にひしめき合う多種多様な太鼓などの打楽器を挙げるだろう。そのなかに、朝鮮半島の太鼓「杖鼓」がある。この楽器は「農楽」とよばれる芸能で、鉦や銅鑼などとともに、踊りながら躍動的に演奏される。韓国語では、リズムのことを「長短」という。ことばのとおり、音の長短の組み合わせの反復によってリズムが生まれるので、言い得て妙である。一方、細かい打楽器のリズムパターンのことは「カラク」ともいう。このことばはもともと音を生み出す手（指）に由来すると考えられており、打楽器だけでなく弦楽器や管楽器のメロディラインも指すところが面白い。

東南アジア展示場では、インドネシアのガムランの演奏を体験できる。複数人で担当を決めて、音の高さや音色が異なる金属打楽器を、モニターで示されたタイミングにしたがって鳴らしていくと、全体でひとつの周期が生まれ、旋律のような音の波も聞こえてくる。



掃除用ブラシで農楽の太鼓(ブク)を叩く女性(韓国、2017年)

るのだろう。編物、織物、染物の配色や織目、文様のパターンにも同じことがいえる。

自然のリズム、労働のリズム

そもそも人間が住む地球では、月の満ち欠けや季節など、自然現象の周期的な反復が常に起きている。人間はそのなかで豊かに暮らす方法を模索してきた。日本の文化展示場には、突然水音がして来館者を驚かせる「脱穀機(バツタリ)」がある。川の流れを利用した機械で、水が木の器に溜まると、シーソーの反対側についてた杵が振り上がり、水がこぼれると杵が白のなかの穀物を搗くくみになっていく。しばらく観察していると、動きと音の規則性がわかるようになる。人間と自然の共同作業によるリズムともいえる。他にも農作業などで、人間が両手両足を動かして効率良くエネルギーを使おうとすると、自然と無理のない規則的な動作が生まれ、それに伴う音にもパターンが生じる。道具の使い方がわかる人には、展示場で労働のリズムが見えたり、聞こえたりするかもしれない。こうしたリズムが音楽のリズムの根源のひとつになっているといえる。



B 首飾り(スイカの種製ビーズ)
(ボツワナ、H0204700)

A 首飾り(ジョージ・ブラウン・コレクション、ソロモン諸島、H0138427)

E 映像民族誌「バイラウダンス」
(番組番号7241)



アフリカ展示
「装う」

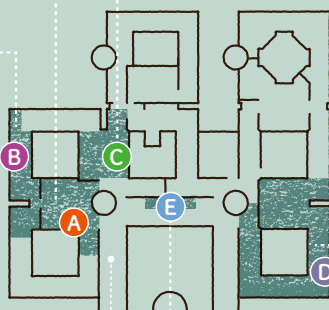
オセアニア展示
「外部世界との接触」

本館展示場

日本の文化展示
「日々の暮らし」

音楽展示
「太鼓 — 荒ぶる音」

C チャンゴ
(韓国、H0214593)



観覧券売場

みんなくシアター

リズムの世界を旅する

みんなく回遊

神野知恵

人間文化研究機構 人文知コミュニケーション
民博 特任助教



聴覚以外のリズム

わたしは、大学で音楽のリズムについて講義することがあるが、多くの学生が「リズムとメロディは別物で、前者は打楽器が、後者は歌や旋律楽器が担当するものです」と話す。しかし本来リズムとメロディは一体であり、ガムランを演奏してみると、リズムが単に音の長さや強弱だけでなく、音の高さや音色によっても生み出されるものだということが体感できる。しかし、当のインドネシアでは「リズム」ということばは存在しないというから不思議だ。打楽器音楽が盛んなゆえだろうか。

ところで、リズムは耳だけで知覚されるのだろうか。みんなくの特設展示でも取り上げられたテーマに世界のビーズがあるが、わたしはこれを人類傑作の「リズム表現」と考えている。例えば、オセアニア展示場にある首飾りには、動物の歯(ふくろねずみ、大こうもりの歯とされる)と、赤、白、黒、碧色のガラスビーズ、貝殻などが小気味よく配列されている。アフリカ展示場でもビーズは来館者に大変人気がある。世界のビーズの多くは、異なる素材をランダムに並べるのではなく、たいてい材質・色・大きさなどによって規則的につなぎ合わせて作られる。人間は視覚、触覚、聴覚などあらゆる感覚において、予測不可能な要素の羅列よりも、ある程度規則的な要素の反復に「快」や「美」を感じ



D 脱穀機(バツタリ)
(長野県、H0001247)

人びとを魅了し続けるリズム

リズムの反復性には、呪術的な魅力がある。ビデオテークブリスや、みんなくシアターで世界の舞踊の映像を見ると、それを感じる事ができる。ネパールの「バイラウダンス」では、神面をつけた演者が次々に円のなかにあられ、太鼓とシンバルの複雑な拍子に合わせて、ステップを踏みながら旋回する。手にはたいまつやでんでん太鼓をもち、腰や足首につけた鈴が振動し、衣装についてた帯が揺らめく。そのすべてがひとつのリズムを成しており、神々の世界を表象している。観客たちはその反復のなかに吸い込まれていく。ジーンズをはいて、スマートフォンを手にしていても、未だに魅了され続けているのである。日本の神楽やイタコによる儀礼の映像でもよく似た姿を見ることができよう。読者の皆さんも、展示場でさまざまな感覚を研ぎ澄ませて、世界のリズムを体感してみたいかがだろうか。

Hからはじまる番号は本館の標本資料番号です。

みんなく映画会

第53回 みんなくワールドシネマ
「ハニーランド 永遠の谷」

日時 1月14日(土)

13時30分～15時45分 13時開場

会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)(定員350名)

池谷和信(本館教授)

司会 菅瀬晶子(本館准教授)

※事前申込制(本人を含む2名まで)、先着順、参加無料(要展示観覧券)

※事前予約の方へ入場整理券を当日11時から本館2階会場入口にて配布します。

※受付期間中に定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。

【申込期間】

■一般受付 1月6日(金)まで

※友の会先行受付は終了しました。

※本号「シネ倶楽部M」(18～19頁)でも紹介しています。

みんなく映像民族誌シアター

本館オリジナルの映像作品「みんなく

映像民族誌「シリーズ」のなかから4つの作品を上映し、監修者によるトークをおこないます。

参加形式

①会場参加 シアターセブン(大阪・十三)(各回定員45名)

②オンライン(ライブ配信)参加(各回定員100名)

※館外での開催です。

※事前申込制(本人を含む2名まで)、先着順、参加無料

「それでも獅子は旅を続ける」

山本源太夫社中伊勢大神楽日誌

日時 1月22日(日)13時30分～16時

(13時開場)

解説 神野知恵(本館特任助教)

山中由里子(本館教授)

杉浦康博・斎藤晋伊勢大神楽

講社山本源太夫社中)

司会 黒田賢治(本館助教)

「マレーシアクラランタンの影絵人形芝居」

日時 1月28日(土)14時～16時

【申込期間】

■一般受付 1月13日(金)まで

※友の会先行受付は終了しました。

「漢族の祖先祭祀と祖廟」

日時 2月5日(日)14時～16時

(13時30分開場)

解説 韓敏(本館教授)

司会 黒田賢治(本館助教)

「オアシス都市のくわっ」

日時 2月11日(土・祝)

13時30分～16時(13時開場)

解説 寺村裕史(本館准教授)

司会 黒田賢治(本館助教)

【申込期間】

■一般受付 1月27日(金)まで

※友の会先行受付は終了しました。

「年々始イベント みんなくうさぎさがし」

みんなくの新しいワークショップ「アクティビティ・カード」を使いながら、展示場にいる2023年の干支である「うさぎ」を探します。参加者には参加賞を贈呈します。

日時 1月7日(土)、8日(日)

10時～17時(16時受付終了、配布予定数がなくなり次第終了)

会場 本館展示場

※本館1階エントランスホールにて当日随時受付、各日先着100名、参加無料

ワークショップ

「みんなくうさぎさがし」

みんなくの新しいワークショップ「アクティビティ・カード」を使いながら、展示場にいる2023年の干支である「うさぎ」を探します。参加者には参加賞を贈呈します。

日時 1月7日(土)、8日(日)

10時～17時(16時受付終了、配布予定数がなくなり次第終了)

会場 本館展示場

※本館1階エントランスホールにて当日随時受付、各日先着100名、参加無料

みんなくミュージアムパートナーズのワークショップ

「こけしのポストカードを

つくろっ！」

日時 1月9日(月・祝)

10時30分～15時30分

(最終受付15時)

会場 本館1階エントランスホール

※申込不要、参加無料(要展示観覧券、随時受付)

「点字体験ワークショップ」

日時 1月14日(土)12時～15時30分

(最終受付15時)

会場 本館1階エントランスホール

※申込不要、参加無料、随時受付

「干支の動物で絵馬を作ろう」

日時 1月15日(日)10時30分～15時

30分(最終受付15時)

会場 本館1階エントランスホール

※申込不要、参加無料(要展示観覧券)、随時受付

「西アフリカのお話し会」の公演」

日時 1月15日(日)

①11時30分～12時

②13時30分～14時

会場 本館1階エントランスホール

※申込不要、参加無料、随時受付

【申込期間】

■一般受付 1月5日(木)から開館します。

年始めの開館のお知らせ

※定員なし(ご自由に参加いただけます)
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)

1月29日(日)14時30分～15時

世界初の多言語による毛沢東バジデータベース

話者 韓敏 (本館 教授)

※2022年12月号

「コレクションあれこれ」もご参照ください。



毛沢東のバジ 2008年収集 H0254045

巡回展

国立民族学博物館コレクション

「ビーズ—つなぐかざるみせる」

会期 1月15日(日)まで

会場 渋谷区立松濤美術館

開場時間 午前10時～午後6時
(入館は閉館時刻の30分前まで、毎週金曜日は夜8時まで開館)

休館日 月曜日(ただし1月9日は除く)、1月1日(日)～3日(火)、10日(火)

主催 渋谷区立松濤美術館
国立民族学博物館

公益財団法人千里文化財団



みんなくゼミナール

※事前申込制(先着順)、参加無料
※開始30分前に開場

第529回 1月21日(土)13時30分～15時
アラビアンナイトとヨーロッパの音楽風景

講師 西尾哲夫(本館 教授)

岡本祥子(ピアニスト)

岡本尚子(本館 特任助教)

会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)(定員400名)

※当日参加受付あり(定員80名)

【申込期間】

■一般受付 1月18日(水)まで
※友の会先行受付は終了しました。

第530回 2月18日(土)13時30分～15時
家族農業の軌跡をたどる

——オーストリアの調査から

講師 森明子(本館 教授)

家族農業は、古くから家族の生活とともにあり、土地の景観をつくるとともに、たゆまぬ刷新もされてきました。ここではオーストリアの家族農業の軌跡をたどることをとおして、現代という時代についても考えます。

会場 本館第4セミナー室(講師登壇会場) 80名、第5セミナー室 他(中継会場) 100名

※第4セミナー室が定員に達し次第、中継会場へご案内します。

※当日参加受付あり(定員36名)

【申込期間】

■友の会先行予約 1月16日(月)～20日(金)(定員36名)、会場参加対象

【申込先】

国立民族学博物館友の会(千里文化財団)

■一般受付 1月23日(月)～2月15日(水)



オーストリアの山地農家(1987年)

みんなくウィークエンド・サロン——研究者と話そう

会場 本館展示場(ナビひろば)

お問い合わせ
国立民族学博物館 広報・IR係
電話 06-6878-8560 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6875-0401
お問い合わせフォーム <https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form>

友の会

お申込みは友の会ホームページ内の受付フォームをご利用ください。

友の会講演会

参加形式

①本館第5セミナー室(定員90名)

②オンライン

友の会会員:無料

一般(会場参加のみ):500円

※事前申込制(先着順)

※会員は会場参加の場合、事前申込不要

第532回 1月7日(土)13時30分～15時
フランスのモン農民と考える「自由」

講師 中川理(本館 准教授)

※オンライン配信はありません。

第533回 2月4日(土)13時30分～15時
モンゴル遊牧民の「ルームツアー」

——モノの配置にみる生存戦略

講師 堀田あゆみ

(大阪国際大学 非常勤講師)

モノとのつき合い方は生業や自然環境、文化によってもさまざまです。「必要最小限」の

モノで暮らしていると語られがちなモンゴル遊牧民ですが、その実態は「何がいくつあるか」ではなく「どうあるか」に着目することではじめて見えてきます。本講演では遊牧民一家の部屋(ゲル)紹介を通して、その実態と生存戦略に迫ります。

※講演会終了後、中央・北アジア展示場のゲルを見学します(定員20名・事前申込制)。

東京講演会

友の会会員:無料、一般:500円

※事前申込制(先着順、各回定員40名)

※オンライン配信はありません。

第131回 1月28日(土)13時30分～15時
古代エジプト文明の新たな研究拠点

——大エジプト博物館への日本の支援

講師 末森薫(本館 准教授)

会場 JICA地球ひろば セミナールーム600

(東京都新宿区市谷本村町10-5)

ギザの三大ピラミッドの近くに、古代エジプト文明の新たな研究拠点「大エジプト博物館」が建設中です。建物は完成目前であり、多くの来館者を迎えるべく展示の準備などが進められています。世界最大規模の博物館の

建設にあたって、日本は資金援助だけでなく、人材育成や技術支援を進めてきました。その背景や成果をお話します。



来館者を出迎えるラムセス2世像と発表者(2022年)

第132回 2月26日(日)13時30分～15時

ベルーの民芸品制作と職人たちのいま

講師 八木百合子(本館 准教授)

会場 モンベル御徒町店4階サロン

(東京都台東区上野3-22-6 コムテラス御徒町)

刊行物紹介

■卯田宗平 著
『外来種と淡水漁撈の民俗学——琵琶湖の漁師にみる「生業の論理」』
昭和堂 4,950円(税込)

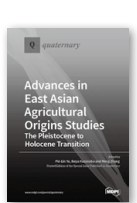
琵琶湖の漁師たちにとって外来生物とは何か。日本の淡水漁撈をとりまく環境が大きく変化するなか、漁師たちは何を残し、何を捨て、新たに何を生み出すのか。「外来」に注目することで際立つ「生業の論理」を示す。

■池谷和信 編著
『アイヌのビーズ—美と祈りの二万年』
平凡社 3,740円(税込)

北海道は、実はビーズアイランドだった。2万年前の石の玉から、現代のアイヌ工芸家が作る首飾りまで、北海道におけるビーズ文化の持続と変遷をたどり、世界のビーズ文化のなかに位置づける。

■Pei-Lin Yu, Ikeya Kazunobu and Meng Zhang (Eds.)
"Advances in East Asian Agricultural Origins Studies: The Pleistocene to Holocene Transition"
MDPI Books ※価格については販売元でご確認ください。

東アジアは、イネ、アワ、キビなどの作物が栽培化された世界の農耕センターの一つである。とくに中国、台湾、日本列島を対象とする研究成果を統合して、現時点での東アジアにおける農耕の導入の過程、社会の変容などを解明している。



アンデスの山道は 登り優先

藤井 龍彦
民博 名誉教授

この始まり

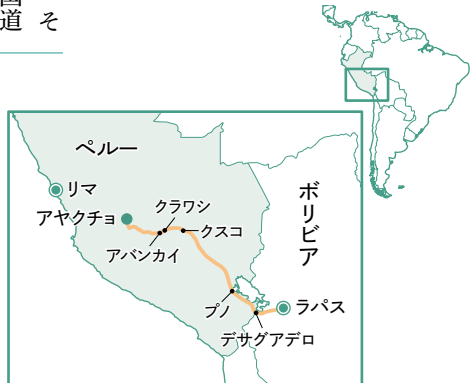
車の陸送をした。陸送とは、一般にディーラーや修理工場が顧客の車を届けることをいう。今回の陸送は、一九六九年の話。わたしが参加した第五次東京大学アンデス地帯学術調査団が、ポリビアのトヨタから借りた車を調査終了後、ラパスへ返却するためであった。ペルーの調査なのになぜポリビアから？というのは、調査団長の泉靖一教授の古くからの友人、ポリビアトヨタの社長河合辰夫さんが無償で提供してくれた車だったからである。

という訳で、わたしが返却の役を引き受けることになったのだが、長距離の山道に行くことになるので、先輩のOさんとの二人旅。個人的には、それまでクスコ以南の高地を車で走ったことがなかったで、それが楽しみだった。出発点は自然人類班が車を預けてい



出発地アヤクチョ市の中央広場(1998年)

ったペルー中部高地のアヤクチョ市。そこからポリビアに行くルートは、国道三号線を南へ。アバンカイ、クスコを経由して南高地をひたすら南下。途中標高約四三〇〇メートルのラ・ラヤ峠を越えるとティティカカ湖水域、三八〇



車の陸送ルート(クラフシからはトラックで)

〇メートル前後の高原地帯に入り、中心地プノを通過して国境のデサグアデロへ。ここまでの距離一三四六キロメートル。しかしここがゴールではない。ポリビアの首都ラパスまでさらに一一八キロメートルを走らなければならぬ。総計一四六四キロメートルの長丁場。二人で運転を交代するにしても数日かかりだ。

想定外のアクシデント

昼過ぎアヤクチョ市を出発。夕方ライトをつけるがメインが点灯しない。引き返すより、次のアバンカイまで行こうと、スモール頼りに屈曲した山道をそろそろ進む。谷底にアバンカイの街の灯が見えてから着くまでの長かったこと。



ペルー北部高地調査中の筆者と、陸送したトヨタのランドクルーザー(1969年)

きたところで、中型のトラックと衝突するという羽目に！ここまで運転してきたのはわたしが、やはり二度の故障で時間がとられたのが気がかりで、カーブでスピードを出しすぎているだろう。

近くのクラフシの警察に届け、現場検証・署での調書作成と型どおりの処理を終えてから、県庁所在地のアバンカイで裁判所に出頭ということになった。Oさんは車を運ぶ手配のためクスコへ。

まだ満足にスペイン語を話せないわたしは一人残され、心細い夜を過ごした。翌日の簡易裁判では、前日Oさんが、「山道は登り優先といわれているし、我々は外国人なのだから、すべて非をみとめて早くすませた方がよい」と言っていたことばに従った結果、相手の損害をすべて弁償するということで和解となった。このときベルトのなかの数枚の〇〇ドル札がなかったらと思うと、今でも冷や汗が出る。

朝、ティティカカ湖対岸のポリビア領の道を、ラパスから電話連絡があった白いジープがやってくるのを見て、ようやくいろいろあった陸送の役目が終わるのを感じた。

胸に刻んだことば

という訳で、わたしの「車の陸送」の仕事は予定していた距離の約三分の一で終わり、残りは車と一緒にトラックの荷台で陸送されるという散々な結果と

翌日、Oさんがクスコで調達したトラックに車を載せ、無事出発。クスコから運転手の妻が乗ってきたので我々二人は車内に入れず、荷台に載せられた車のなかで寒さに震えていた。翌日国境のデサグアデロに着いたが、連絡しておいたのにポリビアからの車が来ない。じりじりしながらOさんと町に唯一の娯楽場で玉突きをしながら迎えを待つ。翌日

なった。しかし考えてみると、その後民博に職を得た翌年の一九七五年から、アンデス高地農村部での最後の調査となった一九八七年までの六回の調査で、ペルー、ポリビア両国の海岸・高地・東斜面を、おそらく合計二万キロメートル以上車で走り回ったが、この陸送での事故後一度も事故を起こさなかったのは、「アンデスの山道では登り優先」ということばを胸に刻み込んでいたお蔭であったと思っている。



ティティカカ湖岸の草原(1985年)



サクサワマン遺跡から見たクスコ市中心部(1981年)

車の陸送をしてみました

一杯のコーヒーに込めた 思いをつないで

西尾 哲夫 民博 グローバル現象研究部



砂漠に暮らすベドウィンにとってコーヒーは大切なおもてなし文化
(エジプト、2002～2003年、ビデオテーク番組1660「ベドウィンの生活戦略——シナイ半島」より)

標コレクション

資料点数：300点あまり

「コーヒーの鬼」とも称された標交紀(1940～2007年)は、吉祥寺にあった自家焙煎コーヒー専門店「もか」の店主で、コーヒー文化の源流を求め世界中を旅してはコーヒー関連資料を収集した。茶器をはじめコーヒー焙煎・抽出器具など貴重なものが含まれ、コーヒー文化研究の重要な資料である。2015年に民博に受け入れ。一部を西アジア展示にて展示中。

<https://ifm.minpaku.ac.jp/mepc/>



標交紀が1962年に開業した
コーヒー店「もか」の看板
(H0279485)



コーヒーカンタータを作曲した
音楽家バッハの人形
(H0279446)

東京の保谷市(現西東京市)に住んでいたとき、
天気の良い日はよく子どもと自転車で吉祥寺の
井の頭公園まで遊びに行った。標交紀が店主を
つとめたカフェ「もか」は公園近くにあった。二
〇〇七年に閉店したので、店の前をとおっていた
かもしれない。そのころは英国に長期滞在してい
たせいで紅茶にはまっていた、かえすがえす標さ
んのコーヒーを味わえなかったのが残念である。
京都での学生時代、百万遍交差点の角にあつ

た学士堂というカフェによく行った。落ち着い
た雰囲気が好きで、初めてのデートもそこだつ
た。まだ純喫茶という名を冠していたと思う。
田舎から都会に出てきたころ、この純喫茶とい
う看板に心をときめかした。
コーヒー文化なるものには縁がなかったが、
『季刊民族学』で企業博物館の連載があつて、
UCCコーヒー博物館の担当になった。学問
の関心をもちはじめたアラビアンナイトの最初

の翻訳者アントワーン・ガランが、最初にコー
ヒーをヨーロッパに紹介した本を書いていたこ
ともきつかけのひとつとなった。調査地であつ
たシナイ半島でアラブ遊牧民のコーヒー文化を
調査したことや、同地で共同調査をしていた中
近東文化センターの発掘隊が、日付の確認でき
るものとしてはもつとも古いコーヒー取引の文
書を発見したことなどが重なり、コーヒー文化
研究にもはまり込んでいった。



19世紀にイギリス
で製作されたコー
ヒーを淹れる器具
(サイフォン)
(H0279346)

コレクションとの縁

そのような折、標和子さんからこのコレク
ションのお話をいただいた。聞けば、夫の標交
紀はコーヒー豆の焙煎技術の探究に尋常ならざ
る情熱をかたむけ、コーヒー文化の源流を求め
世界を旅して回ったのだという。コーヒーに生
涯を捧げた彼が収集したコーヒー関連資料のな
かには、茶器はもちろん世界各地のコーヒー焙
煎・抽出器具など今となっては手に入りにくい
ものもあり、コーヒー文化史研究のための貴重
な品々ばかりである。それらは当時、三鷹市に
ある中近東文化センターに委託というかたちで
所蔵されていた。

出光美術館分館である同センターは、中東研
究では日本の代表的研究所のひとつであったが、
さまざまな事情で古代オリエント研究に軸足を
移すこととなり、イスラーム以降の研究は中止
することになった。そのため貴重な収蔵品は出
光美術館に移され、一部は海外に流出したとも
仄聞する。薄々こういって事情を知っていたの



標交紀の弟子である門脇祐希氏をまじえてのワーク
ショップ(民博職員食堂、2017年)

で、委託資料であつた標コレクションは行き場
がなくて困っていたのだらうと想像した。ただ
他にも適切な場所が頭に浮かんだので、なぜ民
博に白羽の矢が立ったのかが解せなかった。ど
こか逡巡しているように見えたのだらうか、標
和子さんがことばを継いだ。センターの主任研
究員であつた川床睦夫さんが他界する少し前に
彼女が相談したとき、わたしの名前をあげて彼
ならば信頼して任せられると太鼓判を押したと
のことである。意気に感じるとはこういうこと
だらうか、そのことばでわたしは民博で受け入
れることを決めた。

アントワーン・ガランと標交紀

その後、夏の盛りの数日を本館企画課標本資
料係(当時)の西澤昌樹さんと二人でひとつひ
とつの資料を写真に撮りながら原簿と照らし合
わせていった。マツチ箱や絵葉書、コーヒーと
かかわるものなら何でもある。コーヒーカンター

タの楽譜、それを作曲したバッハの人形であつ
たのには正直驚いた。フランス国立図書館が所
蔵するアラビア語写本のコピーを見つけたとき、
標交紀の思いがわたしの琴線に触れた気がした。
彼がアラビア語を解したとは思えない。中東か
ら世界に拡がったコーヒーの初期の歴史に関す
るもつとも重要なアルジャズイリーの著作だ
が、ガランが抄訳ながら最初に紹介したのも同
じ写本からであつた。ガランと標さんをつなぐ
縁と思い、目下この本の日本語訳を準備してい
る。コレクションとは収集者の情の塊である。そ
れらを一旦ばらして文化資源として人類文化の
地平のなかに入れ込みながら再度モノとヒトと
の関係性に立ち返る。そしてコーヒーならばそ
れをめぐる異なった立場の人たちをつないでい
く「結節場所」を共創していくのが、民博人の務め
ではないだろうか。

Hからはじまる番号は本館の標本資料番号です。



フィンジャーンとよばれる小さなコップでコーヒーを飲むベドウィン
男性(エジプト、2002～2003年、ビデオテーク番組1660「ベ
ドウィンの生活戦略——シナイ半島」より)

ミツバチとともに生きる

池谷 和信 いけや かずのぶ
民博人類文明誌研究部

して、巣箱のなかに仕切りを作りミツバチを飼うやり方である。彼らは、遠心分離機や燻煙器くわんえんきを使用して、より多くの蜂蜜を収穫する方法をとっていた。これは、「蜂蜜を収穫する際には、「半分を私に、半分をハチに」という村の女性がおこなっている方法とはまったく対照的であった。トルコ人の家族はハチへの配慮を欠いた方法で蜂蜜を収穫していく。さらには、新しい草を芽吹きやすくするため、牛の放牧地を野焼きしたいという。そんなことをするとハチが蜜を採る木がなくなる」と村の女性は嘆く。

ミツバチと人とのかわり

わたしは、この映画を観てふたつの点が印象に残った。ひとつは、この映画には空中を飛びまわる多数のミツバチとその羽の音、ミツバチの作った巣の形、そして蜂蜜など、生き物の視点からの映像が多いということである。わたしは、周囲の乾いた広大な大地を見ながら、これらのハチはどこから蜜を運ぶのかと思ってしまった。周囲の自然景観には、日本のそれと異なり森林がない。灌木かんげふに咲く花を蜜源にしているのだろうか。また、ハチが人を攻撃する場面も多い。それでも人は防護マスクを身に着けて煙を使って対処する。両者のかかわりを見てい

乾燥した大地

ギリシャの北に位置する北マケドニアの山の村に、母親と暮らすひとりの女性がいる。彼女の仕事は、ミツバチを対象にした養蜂である。映画は、彼女が集落から出て数十メートル以上の高さのある断崖絶壁上の巣の場所に向かう場面から始まる。彼女が石をとり除くと、数えきれないほどのハチが集まってきた。これが、野生のミツバチの巣である。どうもここは彼女が大切にしている場所のようだ。

ある日、この村にトルコ人の夫婦と子どもたちがキャンピングカーで移り住んできた。彼らは数十頭の牛を連れ、トラクターも持ち、その仕事は多彩だ。牧畜だけではない。村外の商人の要求に応じて養蜂もおこなっている。その方法は、居住地の周囲に複数の四角い巣箱を設置

つづく。現在でも人は、ミツバチの行動をコントロールできないと感じる。もうひとつは、日本列島の状況と重ね合わせてみると、日本には、もともとニホンミツバチ（在来種）を対象にした自然養蜂が存在することだ。巣箱を設置して、野外に生息しているハチが巣を作るのを待つ方法である。筒の形や素材は異なるけれどもミツバチに寄り添った村の女性の養蜂とよく似ている。映画の乾燥した大地では釣り鐘型の筒が、森の国の日本では大木をくりぬいた円柱型の筒が広く使用されてきた。近年、街に暮らす人にも手間がかからない趣味として、日本で自然養蜂をする人が増えている点が興味深い。

この映画では、当初、小さな村のなかで新旧の住民はうまくいっていたが、しだいに暮らし方の原理が違うことで対立を生むようになっていった。わたしたち人類は、野生の生き物を飼慣らして自分たちに都合のよい家畜を作ってきた。生産効率が求められてきたが、現代では供給する餌資源の問題が生じている。これに対して、野生のミツバチであれば、自然資源に依存して持続可能な利用のかわりに見える。わたしたちは、北マケドニアでの養蜂からミツバチのまなざしや現代世界の縮図を知ることができ、「伝統」と「近代」のかわりが共存することの難しさを学ぶことができる。



野生ミツバチの蜂蜜の採集(タンザニア、2009年)



© 2019, Trice Films & Apollo Media



© 2019, Trice Films & Apollo Media

一方で、日本では明治以降に西洋から導入されたセイヨウミツバチ（外来種）を既製の巣箱で飼育する近代養蜂が広く見られる。これは、映画のなかのトルコ人の養蜂だ。これには、九州から北海道まで蜜源を求めて季節的に移動する転飼養蜂に従事する人もいる。ただ、この近代養蜂が日本全国に広がり、在来種のニホンミツバチの生息が侵されたといわれてきた。わたしには、これがどこまで真実なのかはわからないが、北マケドニアの山村のようにふたつの養蜂のかたちが共存するのは日本でも難しいのかもしれない。



ニホンミツバチの巣箱(ハチドウ)
(熊本県八代市久連子、2022年)

「ハニーランド 永遠の谷」

原題：Honeyland
2019年/北マケドニア/マケドニア語、トルコ語、セルボ・クロアチア語/86分/DVDあり
監督：リュポ・ステファノフ、タマラ・コテフスカ
出演：ハティツェ・ムラトヴァほか
2023年1月のみんぱく映画会にて上映予定(詳しくは12頁をご覧ください)

3つの言語を操る 「メンヘラ」女子

おかの ひでゆき
岡野 英之
近畿大学准教授

Facebookに意味深な投稿を繰り返す知人がいる。ビキニ姿で泳ぐ自分の姿をアップロードしては「ブタが水に落ちた」とコメントしたり、「望みがないのは知ってるけど、わたしは待ってるね」と意味深なツブヤキをしてみたりと少々危なっかしい。日本では、いわゆる「メンヘラ」と揶揄されてもおかしくない内容である。「メンヘラ」とは、寂しがり屋で依存体質、普段、接しているときには普通なのに、SNS上で意味深な発言やネガティブな投稿を繰り返す。そんなインターネット上のふるまいを示すスラングである。やや侮蔑的な意味合いを含んだことばだといってもよい。

ただ、彼女が暮らすのはタイであり、彼女はタイ語で投稿している。タイのネット社会では「メンヘラ」的なふるまいは、さほど問題視されることはない。彼女の書き込みから「メンヘラ」ということばを想起したのも、やはり筆者が日本語で生活しているからだろう。以降、「メンヘラ」という用語をインターネット上でふるまいを示す用語として中立的に使いたい。

じつはこの女性、Facebook上で2つの国家にまたがる3つの言語を使いわけている。彼女はタイ語の他にもミャンマー語と自民族の言語シャン語でつぶやいている。「メンヘラ」的なふるまいをするのはタイ語に限られる。

彼女はタイの首都バンコクで家政婦として働いている。タイとその隣国ミャンマーは経済格差が大きく、タイへと流れ出る移民労働者が少なくない。彼女もそうした一人だ。ミャンマー

で高校を中退した後、タイに出てきた。だからミャンマー語ができる。しかも彼女にとってタイ語はそれほど難しくない。シャン人だからである。シャン人はミャンマーでは少数民族であり、その言語であるシャン語はタイ語と近い（同じクラ・ダイ語族に属する）。シャン人移民はタイで生活するうちに自然とタイ語を話せるようになるという。また、タイにはシャン人移民を対象としたタイ文字教室がある。彼女もそんな学校でタイ文字を覚えた。さらに彼女が使うシャン文字は、ここ20年で大幅に普及した。1990年代半ばにミャンマー内戦が激化し、数多くのシャン人が難民としてタイへと流入した。ミャンマーでは少数民族の言語を教育することは禁止されていた。その一方、タイでは難民を対象としたシャン文字の普及活動が実施された。シャン文字の使用は広がり、インターネットの普及がそれに拍車をかけた。

タイ語では「メンヘラ」的なふるまいが許容されているものの、その他の言語はそうではない。彼女がシャン語でつぶやくときは、シャン人の年中行事に参加したときが多い。ミャンマー語でつぶやくときは「友達と遊びに行った」とか、「新しい服を買った」という無難な内容が多い。

コロナ禍を機に彼女はミャンマーに戻った。それを機に彼女の書き込みは減った。もしかすると、書き込みが減ったのは、「メンヘラ」的な書き込みが許容されるタイ語の世界から離れたからなのかもしれない。

『月刊みんぱく』は
国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読が可能です。また、友の会会員の方には毎月お届けします。

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するために作られました。本誌購読のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893 (平日9:00~17:00)
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

月刊みんぱく 2023年1月号

第47巻第1号通巻第544号 2023年1月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子
編集委員 三島禎子(編集長) 池谷和信 上羽陽子
岡田恵美 中川理 吉岡乾
制作・協力 公益財団法人 千里文化財団
印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報・IR係をお願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



月刊みんぱく

2023年
1月号

編集後記

かれこれ3年ほど、コンサートや観劇、祭りなどの行事にほとんど出かけていない。その代わりにデジタル化された音や映像が、オンラインの仕事のみならず音楽や文化の楽しみにまで入り込んできた。しかしどうしても現実感に欠ける。ところがそこを逆手にとって生まれる芸術もあるようだ。本号の特集では、世界各地における逆境に生きる芸能者の姿が取り上げられた。

少々、特集のテーマとはずれてしまうが、興味があって、「芸能と疫病」をインターネットで検索してみた。すると、日本各地で伝統芸能者による疫病退散の祈願がおこなわれていたことを知った。科学の威力に立ち向かって文化や芸術の力で対抗しようという思いは、無意識のうちにわれわれの内にあるのかもしれない。コロナ対策として日本中を支配しているソーシャルディスタンスやマスク、黙食などの習慣を吹き飛ばす祈願であってほしいと切に願った次第である。(三島禎子)

次号の予告 2月号

特集「授乳のいま・むかし」(仮)

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

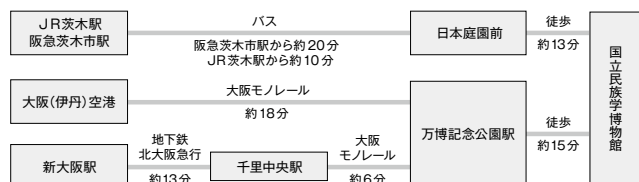
開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は翌日が休館日)
年末年始(12月28日~1月4日)



主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>

